

ケアマネだから できること

番外編

～ピーコとあきちゃん～

木村晃子

居宅介護支援事業所 あったかプランとうべつ

縁日で

あきちゃんは、お祭りの縁日で、カラーひよこを見つけました。箱の中には、赤や、青に色をつけられたひよこが、ぴよぴよと鳴きながら体を寄せあっています。しばらく、ひよこを眺めていると、友達が、100円玉と引き換えに2羽のひよこを手にしていきます。「かわいい！」そう言いながら足早に帰っていく友達をみて、あきちゃんも、ひよこがほしくなりました。

「でも、買って帰ったら、お父さんにも、お母さんにも叱られるな。」そう思って、あきちゃんは、家に帰りました。

「あのね。ひよこが売られていたよ。赤いのと青いの、色がついていないのもいたよ。かわいかったよ。」台所で夕飯の支度をしているお母さんに縁日の様子を伝えました。

お母さんは、知っているかのような口調で「ああ、あんなひよこは、すぐに死んでしまうよ。だいたい、ああいうところで売られているのは、お肉にできないようなひよこが処分されているのだから。」

お母さんから聞く現実、あきちゃんの耳を右から左へ流れていきました。

次の日学校へ行くと、縁日でひよこを買った友達同士が、ひよこについて楽しそうに話をしています。あきちゃんの想いはつるばかりです。学校が終わると、急いで縁日へ向かいました。もう迷いはありません。おじさんに、「一つ、色のついていないの、それ、それください。」と、箱のすみで鳴いているひよこを指さしました。あきちゃんは、ビニール袋に入れられたひよこを大事に受け取ると、家に急ぎました。

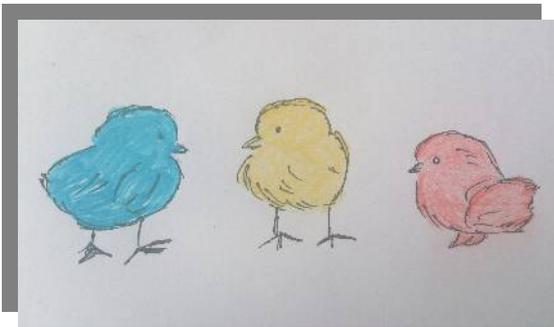
家の前で少し迷ったあきちゃんですが、ひよこをそっと両手に包むと、台所のお母さんのところへ行きました。「お帰り。」と言って振り返ったお母さんはびっくりしています。

「あら、ひよこ・・・。」お母さんの声に、早くに家に帰っていたお父さんが近寄ってきました。「どうした？買ってきたのか？だめだ。それは命だ。ちゃんと育てられもしないのに、かわいいだけではないんだぞ。今すぐ返してきなさい。」そう言っ

て、ひよこの話は聞いてもらえませんでした。

あきちゃんは、もう一度縁日の方へとぼとぼと歩きだしました。でも、あきちゃんの手の中で、小さく震えているひよこを見ると、とても返しに行く気持ちにはなれません。そして、そのまま家に戻りました。

「もう閉まっていて、縁日のおじさんもいなかったよ。返せなかった。」あきちゃんはウソをつきました。どうしても、どうしても、ひよこをそばに置いておきたかったのです。お父さんは仕方なさそうに、「あき、それは命だ。大事に世話をしないとダメだぞ。」と言いました。「わかった、わかっている。ちゃんと世話をするから。」あきちゃんは、よろこびました。



世話をする、と約束したあきちゃんですが、実際には世話の仕方もわかりません。小さなひよこは、寝るときには箱に入れられていましたが、さみしいのか、いつのまにか、あきちゃんの布団の首元へ入ってくるようになりました。

朝起きると、ひよこは、朝ご飯を作っているお母さんの足元でちょろちょろしています。あきちゃんが学校へ行った後も、お母さんの後をついて歩いていました。そして、いつの間にか、「ピーコ」と名前がつけました。

ピーコは、みるみる元気に大きくなっていきます。最初の頃は、乾燥トウモロコシを砕いた飼料を食べていましたが、庭にだすと、「はこべ」をついばんで食べたり、ミミズを見つけては食べ始めました。元気に動き回るピーコを見て、あきちゃんは怖くなることもありました。

同じように縁日でひよこを買った友達の家では、

少し大きくなりかけたひよこが死んでしまった、という話を次々に聞くようになりました。少し肌寒くなってきた頃でした。残念でたまりません。

その頃のピーコの体はどんどん大きくなって、もはやあきちゃんの布団どころか、家の中で飼うような大きさではありませんでした。お父さんは、ピーコが寒さに耐えられるように、物置とピーコの小屋を行き来できるようにしっかりと作りました。

ピーコはますます元気に大きくなります。あきちゃんの家に来た時とは様子が変わっています。頭には、とさかが出てきました。そして、早朝に「コケッコー！」と鳴くようになりました。あきちゃんの家は田舎といえども、住宅地です。朝早くからピーコの鳴き声が響き渡ることに、近所の人から苦情が来ています。「農家でもあるまいし、ペットにニワトリを飼うなんて非常識な話だ。朝から迷惑だ。」そんな声に、近所の長老が言いました。「ニワトリが朝早くに鳴くのは常識だ。常識がわからないのは誰だ。」そんなやりとりがあって、ピーコの鳴き声は許されるようになりました。

寒い冬も無事に越し、春になりました、ピーコは、ひよこではなく、立派な雄鶏になっていました。その頃は、一緒にひよこを買って育てていた友達の家には、もうひよこはいなくなっていました。あきちゃんは、ピーコが元気に育っていることを誇らしげに思いながら、自分が連れてきたあの小さくかわいい姿とはまるで変化した様子に戸惑いもありました。そして、事件が起こるのです。

あきちゃんやお父さんが、庭で仕事をしている時には、ピーコは小屋から出して遊ばせていました。ところが、そこに人が通ると、特に何か赤色のものが目に入ると、ピーコはとたんに飛びつくようになりました。人に激しく向っていくピーコの姿に、あきちゃんも恐怖を感じました。どうやらそれは、「発情期」というものらしいのです。お父さんはあきちゃんに言いました。「ピーコをそろ

そろ仲間のところに返してやらないといけない。ピーコはペットではない。ちゃんとニワトリの仲間に戻そう。」

あきちゃんの気持ちは複雑でしたが、大きくなったニワトリのピーコをどうすることもできないので、お父さんのいう通りにすることにしました。

お父さんが言うには、にわとりはにわとりのルールの中で、仲間と一緒に過ごすのがいいということです。

ちょうど、あきちゃんのクラスメイトには仲良くしている友達のじゅんこちゃんがいました。じゅんこちゃんの家は養鶏所です。そして、お肉やさんでもありました。ピーコはじゅんこちゃんの家で引き取ってもらうことにしました。「絶対にピーコを食べたりしないでね。」とじゅんこちゃんのお父さんと約束をして、晴れた夏の日、ピーコをじゅんこちゃんの家へ連れていきました。

あきちゃんは、学校でピーコの様子をじゅんこちゃんから聞きました。じゅんこちゃんの話では、「ピーコはとっても怖い。近くにいけないよ。」と言います。

学校帰りにピーコの様子を見に行きました。近くに行けない、というじゅんこちゃんが指さす方のニワトリ小屋にあきちゃんは近づきました。そこで目にしたピーコは、まるで様子が変わっていました。ピーコの体の羽がところどころちぎれているのです。傷だらけのピーコなのです。

じゅんこちゃんから、もう少し詳しい様子を聞きました。ピーコがじゅんこちゃんの家へ連れてこられて間もなくのことでした。たくさんのニワトリ小屋に入れられたピーコは、自由気ままに小屋の中を動き回っていました。じゅんこちゃんのお父さんが、朝に夕に、ニワトリ小屋に餌をまきに行った時のことです。ニワトリは、餌が来るとまずは、雄鶏が餌のそばに行き、くちばしで雌鶏の方へとばします。それを雌鶏が食べるのです。ニワトリの世界にはニワトリのルールがあるので、ピーコはひよこの時から、ニワトリの中では

育っていません。食べたい時に自分に与えられたものを、あるいは自分でみつけたものを好きに食べていました。ピーコにニワトリの世界のルールはわかりません。けれども、そんなピーコの勝手な行動は、ニワトリの仲間たちには許されないので、たちまちピーコは、雄鶏達につつかれ、集団の中からはじかれたのです。

その様子を見た、じゅんこちゃんのお父さんは、ピーコをニワトリ小屋から連れ出しました。まずは、ピーコにはニワトリのルールを教えなくてはなりません。次にピーコが連れていかれたのは、「ちゃぼ」という体の小さなとり達の小屋です。ニワトリのルールが身につけていないピーコも、その小屋の中では体が大きいので、ちゃぼ達からは、一目置かれています。自分よりも体の小さなちゃぼ達の中で、ピーコはニワトリの世界のルールを見つけていきました。

じゅんこちゃんのところの養鶏所に来て1年がたちました。ピーコはちゃぼ達の小屋から出て自分と同じ体の大きさのニワトリ小屋に移されました。もう大丈夫です。大きく広い小屋の中で、仲間にはじかれることもなく、ピーコは動いたり飛び回ったりしています。その姿は、あきちゃんが両手のなかに抱えて家に連れ帰ったときあの時とは、全く姿を変えています。立派なとさかのある雄鶏です。

その春、あきちゃんはお父さんの仕事の都合で、その町を離れることになりました。ピーコのことは相変わらず「絶対食べたりしないでね。」とじゅんこちゃんと、じゅんこちゃんのお父さんをお願いして別れの日を迎えました。

お盆やお正月には、おばあちゃんの家があるその町へ遊びに来ていたあきちゃんは、ピーコの話も聞いていました。あきちゃんが町を離れた後、ピーコはじゅんこちゃんの家を離れ、別の養鶏所で世話をされている、と聞かされていました。年をとったピーコはやがて死んでしまった、ということも、そのしばらく後に聞きました。

あきちゃんは、ふわふわとした小さなひよこが可愛くて、自分の家に連れてきてしまったことを少しだけ後悔していました。「育つべきところで、育つこと。親や仲間の中でルールを見につけ育つことが人間も動物も大事なことなのだな。」と感じていました。

あきちゃんが、ピーコから学んだことはたくさんありました。

番外編を書いたこと

1970年代に、祭りの出店には、カラーひよこなるものが売られていました。強烈な原色をつけられたそのひよこ達は、子ども達が喜んで買った翌日には死んでしまう、ということも珍しくありませんでした。あきちゃんの親世代は、にわとりを飼うのは卵をとるためでした。或いは、その肉を食べるというためでした。けれどもあきちゃんは、まるでペットを飼うようにピーコを家に連れてきてしまったのです。きっとすぐに死んでしまう、どこかでそんな風に命を安易に考えていたのかもしれない。思いの他長生きしたピーコは、その成長に伴って、不適切な環境がもたらす様々な時を経ました。

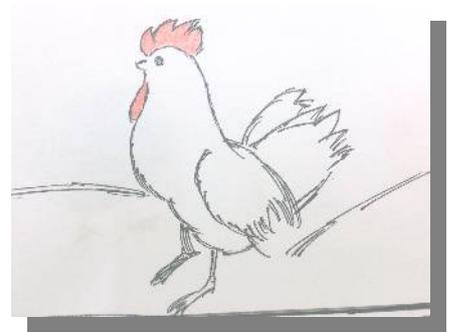
生きるべき環境。見につけるべきルール。人も動物も同じでしょう。発達段階に応じた適切な環境は必要です。それでも、ニワトリの世界に戻ったピーコは、段階を経て自分の世界のルールを見につけたのです。

先に記した話の中で、ニワトリがえさをもろう場面のことを書きました。これは、その当時私が父から聞いた話を、記憶をたどって書きました。その真実の是非はわかりません。でも、確かにピーコは、ちゃぼという体の小さなニワトリの中で、ニワトリとしてのルールを身につけたのです。

私自身は、小さな頃から、多くの子どもたちがとる行動とややかけ離れた行動をしていました。言ってみれば個性の強い子どもだったと思います。それは、成長に伴って更に個性を強くしていきま

した。社会に出てからも、なかなか自分の主張を曲げられなかったり、融通が聞かなかったり。それはややもすると、協調性の無さでもあり、周囲の人から距離をおかれることもしばしばありました。

この3月下旬まで、独立自営業を8年間続けてきました。その理由もそうだったかな、と自分で感じています。



4月からは、NPO法人の職員として、勤務しています。この法人の仲間は、私よりも一回りも若い世代が頑張っている、同じ地域の仲間です。ここ数年、同じ地域で、福祉関係機関として、活動を共にする機会がありました。彼らの一生懸命に働く姿や、仲間を大切にする姿勢はいつも尊敬していました。そして、私に対してもとても親切丁寧な対応をしてくれ、年齢を気にせず受け入れてくれていました。そんな新しい職場での毎日の時の流れの中で、私は、このピーコのことを思い出し、自分の今と重なる部分を感じたのです。私も、もしかすると、社会のルールを身につけていないピーコと同じだったのかもしれない。若い人達が受け入れてくれる環境の中で、私自身が育てられているのかもしれない、そう感じました。

マガジン連載番外編の「ピーコとあきちゃん」には、自分の今を重ねました。そして、私は20歳の頃にこの「ピーコとあきちゃん」という題名で、物語を書くつもりで当時持っていた、ワープロで書き始めたことがありました。その完成を待ち望んでいたのは、私の父です。もう20数年放置していたこの物語を、マガジンの連載の中で完成できたことを嬉しく思います。

ようやく書けたこの物語を、父の病床へ持っていこうと思います。